

令和2年度浜松学院大学附属愛野こども園学校評価結果について

(自己評価結果とそれに対する学校関係者評価結果)

総合評価 B

1 評価項目の達成及び取組状況

評価対象	結果	理由
(1) 幼保連携型認定こども園の教育・保育に関して	B	<p>教育・保育目標 「知恵と力を出し合って生き生きと遊べる子」 重点目標 「からだづくり こころづくり なかまづくり」</p> <ul style="list-style-type: none">・ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領の内容について、基本的な考え方を共通にし、教育・保育で育みたい資質・能力の明確化、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」等を踏まえた保育内容の実践に力を入れることができた。・ 今年度は、特に感染症への予防対策が重要事項となり、日常生活の中でも繰り返し子どもたちに働きかけ、健康な体づくりへの意識を高めることができた。反面、行事の簡素化や地域の人との交流の削減から、活動の工夫や新たな様式を基とした体験等が求められたが、職員のアイデアを出し合うことで、より目標が達成できるよう努めることができた。・ 幼児理解に基づいた指導計画の作成、実践、改善をPDCAサイクルで捉えて行うことで、子どもたちの心の豊かさ、たくましさの育ちを促すことができた。職員の努力の成果であり、保育者自身の質の向上につながった。

<p>(2) 保育の実践力に関して (研修を含む)</p>	<p>B</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人ひとりの幼児の思いを大切に、個人差を踏まえながら主体的に生活できるよう、援助ができ、自己肯定感をはぐくむ実践につながった。また、幼児の遊びや生活に楽しさや、潤いを与えたり、試行錯誤したりするための環境や挑戦意欲が高まる遊具や用具の環境等、計画的に用意し、生活全体を充実させることができた。 ・ 保育者の経験による、実践力の違いはあるが、先輩教諭から学ぼうとする姿勢や、アドバイスを素直に取り入れようとする前向きな姿勢が見られる。 ・ 外部研修の中止が多かったが、リモート研修を通してそれぞれが学ぶ機会となり、保育実践に活かす努力をした。 ・ 園内研修では、今年度は保育部も含め、全員が研究保育を実施し、多面的な意見をそれぞれが自分の学びにつなげることができ、職員の質の向上につながっている。
<p>(3) 教諭としての資質について (能力・良識・適正)</p>	<p>B</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教諭自身、自分を振り返りながら、常に学ぼうとする姿勢が研修、会議等を通して伝わってきている。子どもたちの手本になれるような身だしなみ、言葉遣いに気を付けている。子どもとのかかわりの中で、さらに、安心感や、意欲につながる言葉の掛け方に努めていけるとよい。 ・ 提出物は、催促されてから出すということが一部見られるが、提出日を意識して取り組むようになってきている。 ・ 保育室の環境は、壁面の装飾やザリガニなど小動物の飼育等によって、季節感が感じられるよう準備することができ、時期を捉えた保育環境への意識が高まっている。 ・ 室内の整理整頓は、中には苦手な教諭もいるが、避難経路の確保や棚の上に重い物を置かない工夫などできている。
<p>(4) 教諭同士のチーム力について</p>	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 互いに守秘義務を守りながら、連携や話し合いを重ね、共通理解に至っている。 ・ 役割や担当について、先輩の教諭から方法について聞いたり、自分が経験することで力をつけたりして、学びに活かすことができている。 ・ 職員間の連携では、伝達ミスが生じないよう、伝達の方法を考えて行うことができている。

(5) 保護者との連携に関して	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 園児や保護者の個人情報厳守したうえでの、面談の実施や連絡帳への記載をすることができている。 ・ 保護者からの相談や、担任から保護者への報告事項について、指導教諭等の上司に事前に相談をしたり、事後の報告をしたりして、内容を共有している。
(6) 地域との連携に関して	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員一同、地域に根差した園であることの共通理解を図り、行事等における地域の方のご協力に心より感謝し、伝統的な体験や、自然体験など取り入れ、園児の心身の豊かな発達を促すことができている。 ・ 今年度に関しては、感染症予防のため、実施できない行事があったが、園外保育等で挨拶を進んで交わり、自然なかかわりを大切にすることができた。
(7) 危機管理能力について	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日々、園児の安全と安心を第一に避難経路や災害発生時の対応を考えて保育に取り組んでいる。 ・ 教諭の安全面への意識が高まり、怪我の発生やかみつき等が減少している。 ・ 嘔吐処理の方法や怪我の対応の仕方がわかり、他の職員と連携しながら、自分で対処できる教諭が増えた。 ・ 対応マニュアルを理解し、日々、危機感を持って取り組んでいる。

2 総合的な評価結果

結果	理由
B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育教諭同士のチーム力、保護者との連携、地域との連携は、教諭としての対応力が身に付き、それぞれに自己発揮できているものと評価できる。今後も、連携を大切に、より園児の成長を促すための取組に力を入れていく。 ・ 保育の実践力は、評価が低い傾向である。クラス一人ひとりの園児の特性を捉えた保育実践の難しさがあり、経験が浅い教諭は、先輩の教諭や指導教諭からのアドバイスを受けながら、実践力を高めているところである。今後も教諭の質の向上を目指していきたい。

3 今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取組み
<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもたちの成長を促し、保育の質を高めるための研修（保育教諭の資質向上） ・ 一人ひとりの特性を捉えた学級運営力の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領をもとに、各学年での発達に応じたねらい・内容について理解を深め習得していく。 ・ 一人ひとりの特性を理解し、かかわり方や体験の方法を工夫した取組みに努め、教諭自身の学級運営力を高める。

浜松学院大学付属愛野こども園 園 長 大野 正恵

4 関係者評価委員の意見

<p>A委員</p> <p>(1) 保護者との連携に関して、職員の評価はAで対応ができているとしているが、保護者アンケート結果では、「連携ができていると思わない。」という評価も3～4%あり、人数にして7～8人位いるので、これを減らす努力が求められる。</p> <p>(2) 危機管理能力は、BではなくAでも良い。</p> <p>(3) 総合評価は、3段階だとどうしてもBに落ちてしまう。5段階評価等評価段階を増やせば、変化がわかりやすいと考える。</p> <p>B委員</p> <p>(1) 的確な分析ができている。</p> <p>(2) 地域に支えてくれる人たちがおり、充実した活動ができている様子がわかる。</p> <p>(3) 保育教諭の実践力を高めるには、更なる努力が必要です。今後の活動に期待します。</p> <p>C委員</p> <p>(1) 保護者との連携に関しては、連絡帳の活用に保育教諭・保護者ともに個人差があるのではないかと。連絡帳を上手に活用することで、園での子どもの様子をこまめに知ることで、家庭でも取り組めることがあるなど、園と家庭とで二人三脚で子育てができれば、より良い相乗効果が得られると思う。</p> <p>(2) 保育教諭の質の向上を目指すことは、保護者にとってもありがたいことで、先生方のチーム力が園児と保護者の安心につながると思う。</p>

令和2年度 浜松学院大学附属愛野こども園学校関係者評価委員会委員名簿

NO	氏名	住所	愛野こども園運営委員の要件	備考
1	大野正恵	掛川市	愛野こども園園長	
2	山本淳司	袋井市	愛野地区コミュニティ代表	
3	吉崎成夫	袋井市	愛野地区コミュニティ代表	
4	佐藤佑也	袋井市	愛野こども園保護者代表 (保護者会会長)	
5	笹岑敬一郎	袋井市	愛野こども園保護者代表 (保護者会副会長)	
6	佐々木実保子	浜松市	浜松学院大学講師	
7	坂田温志	浜松市	浜松学院大学短期大学部准教授	